



あ さ い ち

あいさつ

さわやか

いつでも

ちいきと

旭一中だより

第12号

令和元年12月20日

旭市立第一中学校

【教育目標】 持ち味をいかして主体的に行動する生徒の育成

先週は、ご多用の中を三者面談にご来校いただきありがとうございました。生徒の学校や家庭での様子を、本人を交えてお話することができたこと、また、保護者の皆様の日頃の思いや気づきを伺うことができて、大変有意義な時間を持つことができたと感じています。

2学期もあと1日となりました。このまま元気に冬休みを迎え、年明けに再び生徒たちの笑顔が見られるようにと願っています。皆様、どうぞよい年をお迎えください。



★ ★ ★ ★ ★ 栄光の記録 ★ ★ ★ ★ ★



- 【8月】 2日 弘法大師奉賛高野山競書大会 南山賞
- 【11月】 14日 税の標語 優秀賞 「税金は 1人1人の 支えあい」 佳作
- 14日 中学生の税の作文 優秀賞
- 15日 実用英語技能検定 準2級 3級
- 30日 山武オータムン杯中学生卓球大会 女子団体戦 準優勝
- 30日 漢字検定 準2級 3級 4級
- 【12月】 5日 人権作文コンテスト 最優秀賞 (匝瑳協議会)・奨励賞 (千葉県大会)

全ての人が輝く社会を

私は先週、母に誘われて「喫茶ひまわり」という喫茶店へ行きました。そこは、ロザリオの聖母会が運営している福祉施設の中の喫茶店でした。福祉の仕事をしている母は、「一度、行ってみたいかった。」と話し、「そこでは障がいを持った人たちが職員の方と一緒に働いているみたいだよ。」と教えてくれました。私は、基本的には職員が接客を行い、その隣に障がいを持った人が一緒にいるのだろうと想像し、イメージを浮かべていました。

施設の敷地がとても広いため、最初は場所が分からず迷ってしまいました。近くにあった案内板で確認して奥に進んでいくと、ログハウス風の建物に「喫茶ひまわり」の看板がありました。店内に入ると、まず席に案内してくれたのは障がいを持った女性でした。その後お水を出してくれたのも、オーダーを取りに来たのも同じ方でした。この日、会計レジ以外の全ての接客を行っていたのは、最初から最後まで障がいを持った人たちでした。職員の方は、厨房の中から常に声かけをしていました。その光景を見て、自分では十分に動けない人たちに対して何でも手を差し伸べるのではなく、その人がスムーズに動くことができるような声かけと、温かく見守る気持ちが重要なのだと感じました。それにより、障がいのある人がより一層輝ける場所になるのです。「障がい者だから」と勝手に決めつけ、知らず知らずのうちに差別や偏見の気持ちを持っていた来店前の自分がとても恥ずかしくなりました。



想像と違った雰囲気や、そこにいる人たちの生き活きとした姿、やりがいに満ちた様子とおムライスの美味しさで、私は自然と笑顔になっていました。とても興味を持ったので、後で母に詳しく話を聞くと、「喫茶ひまわり」は、社会福祉法人ロザリオの聖母会が運営する知的障害者通所授産施設というものであることが分かりました。「喫茶ひまわり」を利用しているのは、ロザリオの聖母会で働いている職員、施設利用者、ボランティア、一般のお客さんで、昼過ぎになると、平日にもかかわらず満席になるほど多くのお客さんでにぎわっていました。すぐそばには「みんなの家」というパン屋さんがあり、そこでも全く同じような光景を見ることができました。障がいを持っている人たちが地域に溶け込み、生き活きと働いている姿を見て、これこそが「理想の社会」なのではないかと思いました。

障がいを持っている人、持っていない人に関わらず、全ての人が輝ける社会にするために、自分ができることは何だろうかと考えてみました。まだ具体的なことは思いつきませんが、今回「喫茶ひまわり」を訪れて分かったことがあります。

一つ目は、その人のペースに合わせることです。例えば、オーダーを取りに来た女性に対し、聞き取りやすいように、またメモを取りやすいように、ゆっくり丁寧に注文する、そして、私たちに伝えようとしていることを汲み取って返事を返す、というようなことです。ただそれだけのことで、その人が働きやすい環境づくりの手伝いができるのではないかと思います。

二つ目は、障がいについて理解し、その人を見守ることです。「喫茶ひまわり」の職員の方は、障がいを持った人に対して、「お水を出しましょう」と言ったり「オーダーを取りに行きましょう」と言ったりしてアドバイスをしていました。何でも手助けするのではなく、その人のために見守ることが重要なのだと気が付きました。それは、その人の障がいについてきちんと理解していなけれ

ばできないことだと思います。職員の方は、それぞれの障がいについて深く理解した上で指示を出し、その人が自発的に仕事するための道しるべになっているのだと思いました。つまり、相手のことを理解しない行き過ぎた親切によって、人権を奪ったりはしないということです。

障がい者も健常者も、私たちはみな、心を持っている人間ということに違いはありません。全ての人が今を生きる権利を持っています。一部の人が住みにくい社会は、「理想の社会」とは言えません。お互いがお互いを尊重するためには、「障がい」に対する理解も必要です。「障がい」について深くはわからないという人が多い現状だと思いますが、少しでも「障がい」に対する理解が広がれば、さらに住みやすい社会になることでしょう。また、理解したいという心を持っているだけでも、きっと大きな一歩になります。その理解で、その心で、その行動で、「理想の社会」は理想のままではなく現実になります。全ての人がより一層輝く社会になることを、私は強く願っています。

【12月】15日 旭市民駅伝大会 中学校女子の部 **優勝**

1区(区間賞) 2区 3区(区間賞) 4区 5区(区間賞) 6区 7区(区間賞)

祝優勝



私たちは、旭市民駅伝に出場して優勝することができました。何よりも嬉しいのは、昨年出場できなかった分の思いも込めて7人全員でタスキをつなぎ、勝てたことです。陸上競技は個人で戦うことが多いので、団体戦での勝利は貴重なものでした。私は、絶対に1位でタスキをつなぐという強い気持ちで1区を走りました。その結果、区間賞の走りができ、長距離部長としての責任を果たせたと思います。この駅伝を通して、一中陸上部の団結力や絆がより深まったことを感じました。

陸上競技部長距離部長

支部駅伝、東総毎日駅伝と監督として携わらせていただきましたが、どちらの駅伝もメンバー選考はとても悩みました。コースの特性や距離、選手の特徴などを考えながら選考をしていくのですが、通常簡単に決まることはあまりありません。ジグソーパズルで例えるならば、どうしてもピースがはまらない感覚に似ています。しかし、市民駅伝のメンバー選考の時にはあっさり決め、私の中で「もしかしたら・・・」という思いがわきました。ピースがうまくはまり、ベストメンバーを組めたという感覚があったからです。

大会当日は、気温が低く冷たい北風が吹いているという気象条件でした。技術的な面で子どもたちには「普段より少し多めにアップすること」と言葉を掛け、気持ちの面では、「勝負も大事だが、まずは楽しく走ること」と言葉を掛けて送り出しました。最初は緊張して固い走りになってはいないかと不安でしたが、沿道でレースを見守っていると、子どもたちには、真剣な表情の中にもどこか楽しそうに走っている様子が伺え、そこからは安心してレースを見ることができました。

今回の優勝は、走ったメンバーの頑張りはもちろんのこと、選手の付き添いをした部員や全力で応援した部員、残念ながら棄権となってしまっても切り替えてサポートをしてくれた男子チーム部員など、陸上部全員で拮んだ『チーム旭一』の勝利だと思います。私も改めて「駅伝」という競技の素晴らしさを感じさせてもらい、子どもたちには本当に感謝したいと思います。

最後に、日頃から応援してくださる保護者の皆様や先生方、熱い声援本当にありがとうございました。

陸上競技部顧問

「旭一中は本当によくまとまっていていいチームだねえ！」・・・スタート前に審判長から声をかけていただきました。笑顔を絶やさず明るく元気で、男女関係なく互いに励まし合い支え合い、一所懸命に応援できる生徒たち。改めて誇らしく感じました。久しぶりの出場と優勝！うれしい限りです。